

## 登壇者プロフィール

### 小宮真樹子(こみや・まきこ)

近畿大学文芸学部教養基礎教育部門准教授。共編著書に『いかにしてアーサー王は日本で受容されサブカルチャー界に君臨したか』(みずき書林、2019)、編著書に『アーサー王、多言語・古典作品を遍歴すること』、『円卓の騎士たち、エンタメ・ビジュアル作品に進軍すること』(アトリエサード、2023 予定)。

### 本多まりえ(ほんだ・まりえ)

明治学院大学文学部英文学科准教授。専門はシェイクスピアを中心とする初期近代イギリス文学。単著に『Henry Chettle's Careers』(英宝社、2015年)、共著に『十七世紀英文学における 病と癒し』(金星堂、2023年(近日刊行))、『緑の信管と緑の庭園』(音羽書房鶴見書店、2021年)等がある。

### 向井秀忠(むかい・ひでただ)

フェリス女学院大学文学部英語英米文学科教授。英文学。著書に、『コメディ・オブ・マナーズの系譜』(共編著、音羽書房鶴見書店、2022年)、『スコットランド文学の深層』(共著、春風社、2020年)、『帝国と文化』(共著、春風社、2016年)、『ヴィクトリア朝の文芸と社会改良』(共編著、音羽書房鶴見書店、2011年)など。

### 秦邦生(しん・くにお)

東京大学大学院総合文化研究科准教授。英文学。著訳書に『ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読む』(編著、水声社、2021年)、『イギリス文学と映画』(共編著、三修社、2019年)、レイモンド・ウィリアムズ『オーウェル』(訳書、月曜社、2022年)、*Literature Compass, Special Issue on the Histories and Practices of Modernist Studies in Asia* (2023, co-edited with Nan Zhang)など。

### 杉本圭子(すぎもと・けいこ)

明治学院大学文学部フランス文学科教授。19世紀フランス文学研究、とくにスタンダールを中心とするリアリズム小説、旅行記を中心に研究。訳書にスタンダール『恋愛論』(上・下、岩波文庫、2016)、著書に『スタンダール変幻』(共著、慶應義塾大学出版会、2002)。

### 山本潤(やまもと・じゅん)

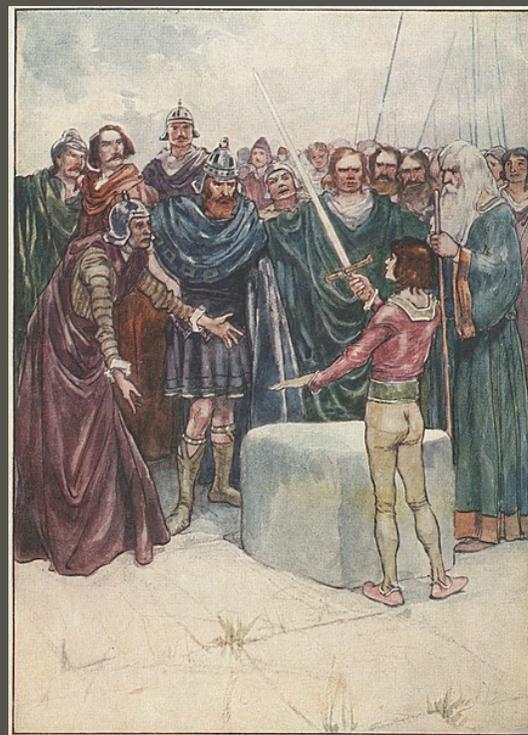
東京大学大学院人文社会系研究科准教授。著書に『記憶の変容—『ニーベルンゲンの歌』および『ニーベルンゲンの哀歌』にみる口承文芸と書記文芸の交差』(単著、多賀出版、2015)、『カタストロフィと人文学』(共著、勁草書房、2014)、『固有名詞の詩学』(共著、法政大学出版、2019)など。

### 相木裕史(あいき・ひろし)

津田塾大学学芸学部英語英文学科専任講師。20世紀アメリカ文学。論文に“Modernist Authorship and Visual Culture in F. Scott Fitzgerald's *The Great Gatsby*” (『東京外国語大学論集』2020年)、“‘The Wonderful and Varied Spectacle of This Universe’: Spectatorship in Henry David Thoreau's *Walden*” (『英文学研究 支部統合号』2017年)。

# Translation Adaptation Intertextuality

古典を考える



日時: 2023年3月7日(火) 13:00-17:35  
場所: 明治学院大学 高輪校舎15B03

# プログラム

13:00-開会

13:05-14:05 基調講演

小宮真樹子「アーサー王とペンドラゴン—伝説における固有名詞のアダプテーション」

騎士道文学に用いられる表現「ロマンス」とは、「ラテン語から俗語に書き換えられた」が由来である。中世ヨーロッパでは歴史書をベースに、多くの翻案物語が作られた。ロマンスの中でもアーサー王を題材とするものが人気を博したが、とりわけ「ペンドラゴン」という固有名詞の変遷が興味深い。21世紀現在、国内外の様々な作品で「アーサー・ペンドラゴン」という名前が用いられているが、これは中世の用例とは異なる。12世紀ジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』において「ペンドラゴン」はアーサーの父・ウーサーの肩書として登場し、中世ロマンスにおいてはウーサーの兄弟の名、アーサーの兄弟の名、または地名として用いられた。本発表では複数のアーサー王作品を例に、「ペンドラゴン」という固有名詞を分析したい。その解釈の変化を通じ、人々がどのような理想をアーサー王伝説に託したのかを浮き彫りにすることが目的である。

14:20-15:50 シンポジウム第一部

本多まりえ「驢馬に変身したボトムの演劇的效果—『夏の夜の夢』と材源『黄金の驢馬』・『変身物語』との比較」

シェイクスピアの『夏の夜の夢』は、古代アテネの森を舞台に、惚れ薬による人間と妖精の一夜の騒動を描いた喜劇である。主筋の大半は作者の発案だが、プルタルコスやチョーサーなどの古典に依拠した部分もある。当時、熊いじめ含む動物の見世物は人気が高く、演劇のライバルであった。シェイクスピアの作品にはしばしば動物の比喩が用いられ、生きた動物が舞台上に登場したこともあったようだが、これらの点から彼が動物に関心を寄せていたことが窺える。『夏の夜の夢』は、動物の比喩が多用される点だけでなく、動物に変身する人物—頭だけ驢馬になるボトム—が登場する点でも注目に値する。ボトムの変身はアプレイウスの『黄金の驢馬』とオウィディウスの『変身物語』を材源とするが、これらと異なる点もある。本発表では『夏の夜の夢』におけるボトムの変身に着目し、『黄金の驢馬』・『変身物語』との比較から、その演劇的效果や人間と動物の関係を考察する。

向井秀忠「映画は原作を殺すのか—古典(キャン)を映像化することの政治性」

アダプテーションについて考える際、原作の新しい魅力の発見を通して再評価につながることや一般的な認知度を高めるなどの利点がある一方、原作の本来の意図や主張を歪めてしまう指摘されることもある。たとえば、1995年にBBCによってジェイン・オースティンの小説『高慢と偏見』がドラマ化され、いわゆるオースティン・ブームが巻き起こったが、結局、このことがオースティンの読者を期待したほど増やすことにはつながらなかったとされている。また、小説の映画化に際しては社会状況に大きな影響を受けることもあり、原作の意図とは大きく異なる映像作品となってしまっている場合も多い。今回は、映像化された次の作品、ジョージ・オーウェルの『動物農場』のアニメ(1954)、Netflixで視聴できるオースティンの『説得』(2022)とL. M. モンゴメリの『アンという名の少女』(2017)などを取り上げて、アダプテーションの周辺とその政治性について考えてみたい。

秦邦生「古典と戦争—カルヴィーノ、グリーン、ロレンスとともに考える」

「なぜ古典を読むのか」(1981年)という魅力的なエッセイのなかで、イタリアの作家イタロ・カルヴィーノは、読者としての私たちにとっての「古典」と「時事問題」との不可離な関係性と、その複雑な相互作用について語っている。アダプテーション研究にとってもこの「古典」と「時事問題」との関係は有益な切り口になるかもしれない。私はグレアム・グリーン原作、キャロル・リード監督の『第三の男』(1949年)を学部授業で過去数年間教えてきたことがあり、この作品を知り尽くした気になっていた。ところがロシアによる2022年のウクライナ侵略開始後に授業でこの作品を再度教えた際、それまでまったく気にもとめなかったあるディテールに強い注意を惹きつけられた。現在進行形の戦争は、私たちの「古典」意識をどのように変容させるのか。D・H・ロレンス『チャタレー夫人の恋人』(1928年)とそのラジオ・ドラマ翻案 *The Chatterleys* (2023)を題材に考えてみたい。

16:05-17:35 シンポジウム第二部

杉本圭子「スタンダール『赤と黒』—古典と近代とのあいだで」

風刺攻撃文書『ラシーヌとシェクスピア』(1823、1825)でフランスの古典主義文学を攻撃し、新たに勃興しつつあったロマン主義文学を擁護したスタンダールは、小説の中でもギリシャ・ローマの古典に触れることが少なかった作家である。王政復古期のフランスを舞台とする『赤と黒』(1830)にも、シェクスピアの悲劇やモーツァルトのオペラなど、近代の新たな「古典」の影響が認められるが、同時に中世の韻文物語やモリエール劇など、古きよきフランスの伝統に根ざす作品への言及にも事欠かない。今回の発表では第一部の、田園を舞台とする牧歌的なシークエンスに悲劇的な色合いを加える『ヴェルジエの奥方』の物語との関連を中心に論じる。

山本潤「ドイツ・オーストリア史と『ニーベルンゲンの歌』—近代以降の受容と再作品化」

13世紀に現在のドイツ・オーストリアの国境の街バツサウにおいて、民族大移動期より語り継がれてきた英雄伝承を素材として詩作されたのが、英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』である。同作品は16世紀初頭から数世紀にわたり忘却されていたものの、18世紀半ばに再発見されると、19世紀初頭にはドイツ語圏の民族叙事詩とみなされることとなる。そして1945年の第二次世界大戦の敗戦に至るまで、常にドイツおよびオーストリアの近代史に密接に結びつく形で受容および再作品化が行われた。本発表では、『ニーベルンゲンの歌』の近代以降の再作品化のなかで、戦間期に制作されたフリッツ・ラングによる映画『ニーベルンゲン』(1924)および第二次世界大戦末期から戦後にまたがって書かれたマックス・メルによる戯曲『ニーベルンク族の災厄』(1944/51)を主対象として取り上げ、ドイツ語圏近代における『ニーベルンゲンの歌』のアダプテーションの諸相を探る。

相木裕史「ケイト・ショパンの『目覚め』におけるトリスタニズムと女性の身体」

世紀転換期におけるリヒャルト・ワーグナーの一大ブームは、ヨーロッパのみならずアメリカをも席卷した。同時代のアメリカ文学の担い手がワーグナーの芸術や思想を自らの作品に取り入れた痕跡はさまざまに観察されるが、本発表においては、そのような文学作品のひとつとしてケイト・ショパンの『目覚め』を取り上げる。ワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』は、中世ヨーロッパのトリスタン伝説の音楽的アダプテーションだが、語られざる女性の欲望を描き出すショパンは、ワーグナーをいわば文学的にアダプトする。ショパン作品における音楽的要素は多くの研究者によって注目されてきており、近年では情動理論の観点からも読み直されている。それらの先行研究の成果をふまえ、本発表では、ワグネリズムの理知的側面と対比されるトリスタニズムという概念を参照しながら、『目覚め』における重層的アダプテーションと女性の身体表象の関係を明らかにしたい。

\*表紙絵は H. E. Marshall, “An Island Story: A Child’s History of England,” 1906.